

# ゴルフ場化を免れたカヤ場 かつての利用の姿と再生の試み

群馬県みなかみ町藤原地区上ノ原

文・編集部



「上ノ原 入会の森」の案内板と北山郁人さん（右）、林親男さん（中）。左の吉澤拓也さんは今年藤原に移住。NPO法人奥利根水源地域ネットワークの一員として北山さんと行動をともにしている

利根川はみなかみ町藤原地区に源を発する。その支流の水源地がある武尊山から北西に延びる須原尾根の先に「上ノ原」という台地がある。その一角がいま「入会の森」と名付けられ、地元住民の協力のもと、利根川下流域の市民団体「森林塾青水」が管理し、さまざまな体験の場となっている。

森林塾青水現地事務局の北山郁人さんと「藤原案内人クラブ」の林親男さんに案内していただいた。

**カヤ刈り・カヤ葺きは  
みんなで手伝った**

「入会の森」はススキ草原とその北側に続くミズナラを主とした落

葉広葉樹林からなる。いま残っているススキ草原は11haだが、上ノ原一帯はかつて、標高900〜1100mほどの台地に見渡すかぎりススキの原が広がっていた。その面積は200haあまり。ここはカヤ場として藤原地区の入会地となっており、秋に収穫したススキは家々の屋根を葺くカヤはもちろん、炭俵や養蚕のマブシ、雪囲いなどに広く利用されていた。また、夏に刈ったススキの青草を干したものをカッポシ（刈り干し）といって、馬の飼料・敷料にした。

屋根のカヤ替えの様子を、藤原の歴史に詳しい林親男さん（79歳）にうかがった。カヤ替えは30〜50年に一度行ない、前年のうちに組長に申し出ておく。口明け（刈り取り解禁日）は10月末。組長の寄り合いでその年の口明けの日が決まった。刈り取りは近所の30軒ほどに親戚が加わって総出で行なった。1坪分のカヤを束ねたのが1束。それを5束立てかけて、まとめてくくりつける。これを「1ポッチ」といい、ポッチの状態で10〜15日程度乾燥させる。干し上がったところで、木を中心に立て、直径4m高さ3m程度にカヤを積み上げた「ニウ」をつくる。

この状態で冬を越し、3月、雪の表面が固く縮まったところにそりで里に下ろした。標準的な5間（9m）×10間（18m）の家の屋根を葺くのに5000束程度のカヤが必要だった。単純計算で、1軒の家の屋根葺きに使うカヤ場の面積は1・65haほどになるだろうか。

屋根葺きは4月から5月ごろ1カ月ほどかけて行なった。これは新潟や地元の職人が中心になるが、近所の人も手伝う。とくに最初に古い屋根材をはずす「屋根こぼし」は大変な作業で、近所の人と親戚が煤まみれになりながら手伝ったという。

カヤ場を維持するために毎年の野焼きも重要な作業だった。地表にたまった有機物を燃やし、樹木の侵入を抑えてよいススキを育てる。上ノ原の野焼きは「雪間を焼く」といって、雪がまだらに融けた4月下旬ころ行なわれた。そのほうが延焼の恐れが少ないからである。上ノ原は火山灰の瘦せた土質のせいから、株分かれせず、根元からまっすぐ長く伸びた上質のススキがとれた。

**生活と切れたカヤ場の行く末は**

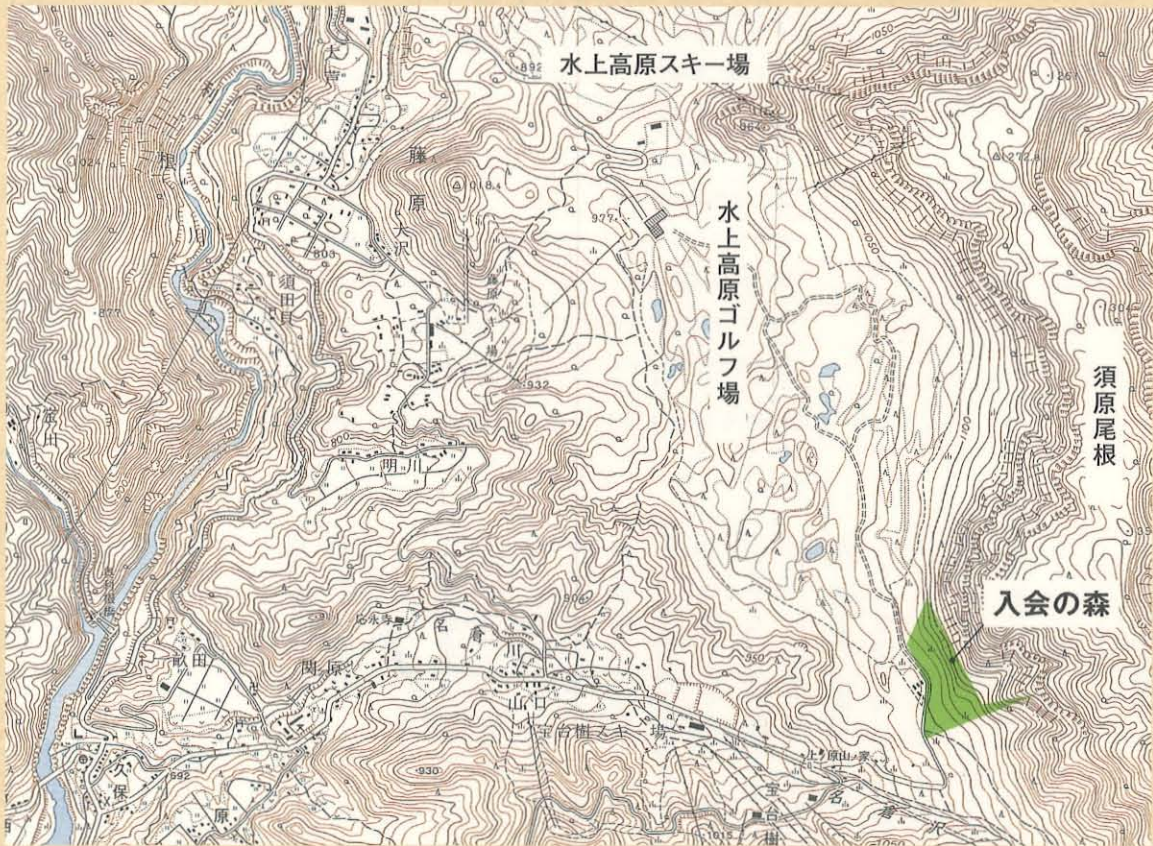
このようなカヤ場とむらの暮ら





カヤボッチ 写真提供：森林塾青水

みなかみ町藤原地区と  
上ノ原の位置



国土地理院1:25000地形図「藤原」「藤原湖」より、「上ノ原 入会の森」の周辺。かつては水上高原ゴルフ場、水上高原スキー場とあるあたりまで上ノ原のカヤ場が広がっていた

しの深いつなかりは徐々に薄れていった。まず昭和初期にカラマツの大規模な植林が行なわれ、草地在半減した。さらに肥料が化学肥料に置き換わり、馬を飼わなくなり、最後に残った屋根葺きも1960（昭和35）年ころを最後に行なわれなくなった。入会地としての伝統的カヤ場利用はここで廃れたわけである。カラマツ林も1964年の台風で大被害にあった。

カヤ場はカヤ（ススキ）だけでなく多くの副産物を生みだしていた。ハギやクズは家畜の飼料や生活用具として使われ、クズやワラビの根からは粉がとれた。とくにワラビ粉は糊の原料として売られ、貴重な現金収入源になっていた。野焼きをするのはよいワラビをとるためでもあった。

ワラビ根を掘らなくなってからも山菜採りだけは続く。1965年ころまで、上ノ原のカヤ場では春先ワラビ、フキ、ゼンマイなどの山菜をとり、他所からくる人から入山料をとって「入山証・青物採取券」を発行していた。そのため、屋根葺きがなくなっても、この間は野焼きが続いていたらしい。こうして藤原の人たちにとって価値がなくなった上ノ原は196



## 上ノ原の変遷

年代	出来事
1883年(明治16年)	官有地に編入。入会地としての利用は昔どおり。
1921年(大正10年)	水上村に払い下げ(国有林野不要存置)。1万5028円。
1927年(昭和2年)～1932年(昭和7年)	カラマツの植林78ha(県行造林)。
1943年(昭和18年)ころ	農兵隊がジャガイモ、キクイモなどを栽培。
1945年(昭和20年)以降の食糧難時代	カヤ場の一部をカンノ(焼き畑)に。
1947年(昭和22年)ころ	学校林としてカラマツ植林。「防火線(防火帯)切り」が学校行事に。
1950年(昭和25年)～1965年(昭和40年)	外部から山菜採取のため入山する者に対して「入山証・青物採取券」(30～100円)を発行。
1956年(昭和34年)	カラマツ植林、台風15号で大被害。被害木420m <sup>2</sup> を206万500円で売却。
1960年(昭和35年)ころ	藤原地区最後のカヤによる屋根替えが行なわれる。カヤの伝統的入会利用が消滅する。
1965年(昭和40年)ころ	最後の野焼き。
1965年(昭和40年)	大部分が国土計画(のちのクコド)に売却される(町有地21haを除く)。
1986年(昭和61年)	水上高原ゴルフ場オープン。
2003年(平成15年)	町有地21ha。水上町と森林塾青水が管理委託契約。
2004年(平成16年)	40年ぶりの野焼き。
2008年(平成20年)	「茅刈り講習会」「茅刈りコンテスト」開催。
2012年(平成24年)	第9回全国草原サミット・シンポジウム in みなかみ開催。

出典：「多面的価値のある草原を持続的に保全する仕組みの構築 報告書」(森林塾青水、平成22年3月)を一部改編。

5年、西武グループの開発業者である国土計画に町有地部分の21haを除いて売却された。それから20年経ち、バブル期がはじまった1986年、水上高原ゴルフ場がオープン。その後経営主体は変わったが、上ノ原の大半はゴルフ場になっている。

### 都市住民も参加する 新しい入会地

ゴルフ場化を免れたわずかなカヤ場跡地が脚光を浴びたのは2003年のこと。森林塾青水と水上町(当時)がこの町有地部分の管理委託契約を交わしたのである。

森林塾青水は「飲水思源」を基本精神に、利根川最源流域で森林保全の活動に取り組み、藤原地区内で新たな活動の場をさがしていた。新たに「入会の森」と名づけられた町有地の内訳はカヤ場だったススキ草原が11ha、その北側に薪炭林として利用されていたミズナラ林10haが広がる。放置されたススキ草原にはすでにタニウツギやシラカバが侵入し、森林化が進んだところもあった。

森林塾青水はまず草地とミズナラ林の現況を調査し、地元の人たちに上ノ原の利用の歴史を聞き取

った。協働でカヤ刈りや侵入樹木の除去作業をはじめ、2004年には40年ぶりに野焼きを復活させた。11haを3つのゾーンに分け、1ゾーンを3年に1回焼く計画だ。「雪間を焼く」の伝統通り、雪がまだらに残る4月下旬に雪で防火帯をつくり、その中を焼く。

カヤ刈りには多くの人手が必要だ。森林塾青水では「茅刈り講習会」を実施し、人集めをしている。受講者は地元の人から講習を受け、技能検定を受ける。たとえば中級のチェック項目では「1時間にかヤを3ポッチ刈り、きちんと束ね



残雪を防火帯にして野焼きを復活  
写真提供：森林塾青水





「茅刈り講習会」。地域の人にカヤボッチの束ね方を教わる受講生たち  
写真提供：森林塾青水

て1・5m以上の高さのポッチがつくれる」という具合。到達度によって、「茅刈士」「茅刈士心得」などの称号を与えている。

野焼きやカヤ刈り、冬の雪原散策などイベントには首都圏などの会員・会員外の人が毎回50名程度参加する。1年間に集めるカヤは約3000束。1束100円程度で、中之条町で伝統建築の修理保存を手がける町田工業が買い上げる。藤原地区内の茅葺き建築である雲越家住宅（国指定重要有形民俗文化財）や諏訪神社の歌舞伎舞

台のカヤ替えのときには無償で提供している。

野焼き、カヤ刈りが復活したスキ草原にはオミナエシやオカトラノオ、トリアシショウマ、ミツバヒヨドリ、オオウバユリといった草原性植物がみられるようになり、セセリチョウ類やアサギマダラなどが飛来するようになった。町では条例（注）の指定地域にして、昆虫などを保護している。森林塾青水はカヤ場やミズナラ林内の木場道（かつて薪炭の積み出しに使われた道）の整備や散策、自然観察会も行なっている。

藤原地区は民宿やペンションなどの観光を産業の柱としてきたが、目当てのスキー客はバブル期に比べて大きく落ち込んでいる。そうしたなか林親男さんたちは「藤原田園空間博物館」構想の延長として、ペンションの経営者ら15人で、「藤原案内人クラブ」をつくり、森林塾青水と連携して集落と集落を結ぶ古道を整備したり、藤原の歴史・文化を伝える活動をしている。

一方、北山郁人さん（40歳）は森林塾青水の会員としての活動をきっかけに5年前にみなかみ町に移住し、現在は塾頭として現地事

務局を務めるかたわら、「みなかみ町体験旅行」に勤務し、学生旅行の企画や受け入れなどに携わっている。そこでは上ノ原周辺での自然観察や体験も重要なメニューとなっている。北山さんは藤原地

区の古民家を再生して住む。藤原の人びとの生活から切れてしまったカヤ場が、都市の人を含んだ「入会地」として再生し、新しい観光の形と若い人の仕事も生み出しているのである。

## スキー場も昔はむらのカヤ場だった

——鳥取県若桜町・春米財産区の場合

燻蒸カヤを高値で販売する氷ノ山カヤ組合（24ページ）がカヤ刈りをしているスキー場も、もともとむらのカヤ場として使っていた財産区の山。昭和30年代ごろの開発事業で、財産区の一部を、スキー場を管理する会社や町に貸した。その後もカヤ刈りや野焼きは続けていたが、むら最後の茅葺き屋根がなくなった昭和の終わりごろを最後にやめてしまったそうだ。

組合の代表の森岡芳明さんにカヤ場だったころの話を聞いた。

「秋のカヤ刈りは集落総出の総事（ごうじ）でした。一軒から最低一人は出て行っていつせいに刈ったんです。刈ったカヤは束ねて集落に持ち帰ったら、冬の間は各家の軒下に並べて雪囲いにしてました。ここは2mも3mも雪が積もりますから。春になったら屋根を補修する家にどさつと持っていくって屋根に上げました。屋根の職人なんてのはいなかったと思いますよ。むらみんなやってましたね」

カヤ場の周りにはミツマタやヤナギの林があり、紙や柳行李の原料として販売。農地の少ない山村の財産区は現金収入を得るための大切な場所でもあった。

（注）みなかみ町自然環境及び生物多様性を守り育てるため昆虫等の保護を推進する条例



# ス

スキのカヤ場は集落から少し離れた山にあることが多

かったが、ヨシのカヤ場はヨシ原は水路やため池、河川敷などの水辺にあった。しかし水辺は国の所有地であることも多く、有名な渡良瀬遊水地（26ページ）や北上川下流などのヨシ原は、近隣集落が共同で「管理権」だけを持っているようだ。ヨシは昔から、自給用（屋根や飼料、肥料など）だけでなく商品作物としても貴重だった。近畿地方最大のヨシ群落がある琵琶湖の内湖・西の湖のヨシ原は、すべてが私有地だ。ここではヨシ原は農地と同じような扱いで「ヨシ地」と呼ばれる。

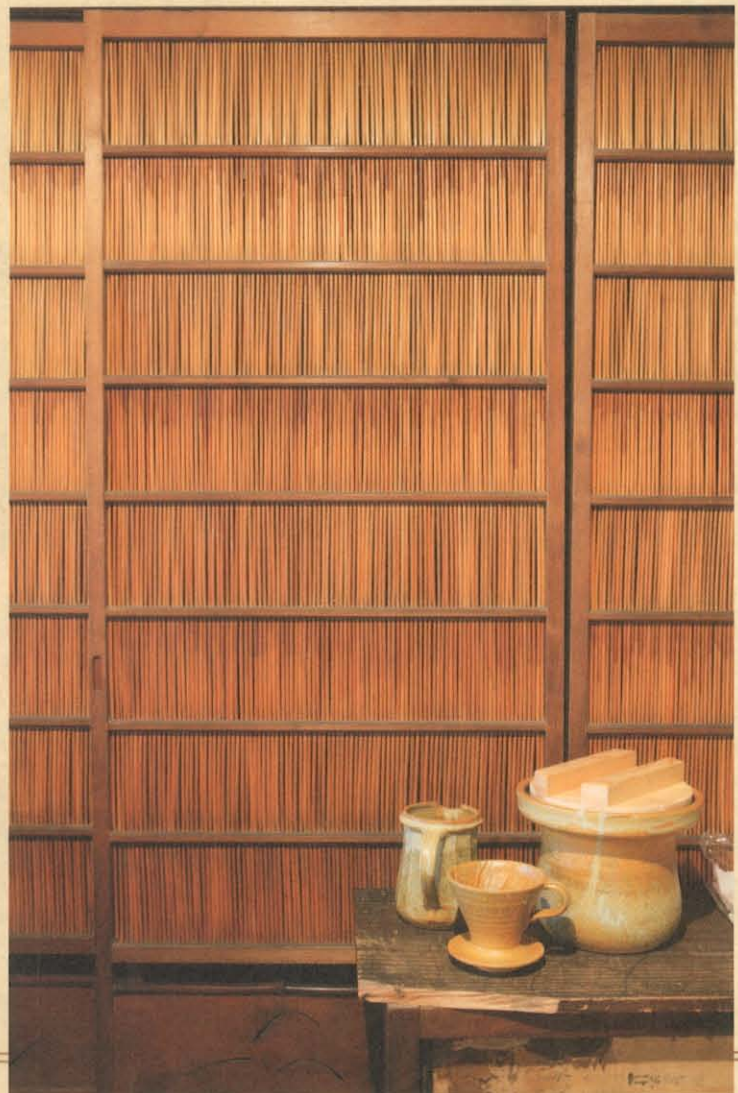
かつて、地主は良質なヨシがとれるよう毎春自分のヨシ地を焼き、入札でヨシを刈る権利を売った。その価格は最盛期で10ha1000万円にもなったという。ヨシを刈り取り、屋根屋やヨシズ屋などに販売するのは別の家の仕事である。ヨシ刈りの際には、「刈り子」として地元の農家がたくさん雇用され、1束いくらの歩合制で冬場の収入を得ていた。ヨシ地は個人のもので、ヨシの恩恵は地域全体に行き渡っていたようだ。

## 琵琶湖のヨシ原

文=編集部

昭和40年代になると中国産ヨシやヨシズの輸入増加で需要が減り、産業としては縮小したが、いまだにここは近江ヨシの産地として存在感を持っている。1993年にはラムサール条約湿地となったこともあり、ボランテニアの手を借りながら、地域主体の管理が続けられている。

地



### ヨシ戸（夏障子）

ヨシ戸など建具に使う細くて強いヨシは貴重品 写真=高木あつ子





## ヨシ焼き

時期は3月下旬



冬のヨシ。1月頃に葉が枯れ落ちて茎が一本立ちする  
写真提供=真田陽子、以下も



## ヨシ刈り

西の湖には現在109haのヨシ群落がある。「刈り子」は刈り取りの機械化が進んだことなどで、歩合制ではなく日当になったが、今も農家の冬の仕事。安土町で約25haほどを刈り取る茅葺き業者「葎留<sup>よしのり</sup>」では、3カ月でのべ600人を雇用するそうだ

## ヨシ灯り展

2007年から「ヨシの利用を広げてヨシ群落を守ろう」と関係する自治体やヨシ業者が中心となってはじめた。毎年9月下旬の土日で開催し、今年で8回目。西の湖沿岸の「よしきりの池」一帯には、地元の小学生や老人クラブなどが製作したオブジェ400点ほどが展示される。小学校では総合学習の時間でヨシの歴史や文化について学んでいる

